

会員数(54・4現在)

逗子地区 128名

兼山地区 200名

大船地区 67名

計 395名

吟道月報

社団法人 日本詩吟学院 岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

54・4月

第81号

発行 者 辛 岳集 風風
編 者 愛梁
根 村元
中 秋

詩との出あい

堀内支部

石

渡

桂

風

花の下一壺の酒一人酌んで相親
しむなれ：この李白の月下獨酌の
詩を始めて聞いたのはもう八年位
も前になりますでしようか；吟舞
一体となつて私の心に強く印象づ
けられ大人李白の悠々の詩の世界
に眼を開かせてくれたものでした。
其の時の会場は地下で外の雑音
も入らず、半楯鉢状の観客席から
下に舞台を見るという構造のせい
か一層新鮮に舞を眺めることがで
、吟の響きの良さにのるように
ゆったりとした舞姿は今も尚そこ
だけスポットライトを当てたよう
に間に浮かぶのです。テーブルに人
れてきた吟を繰返レ／＼聞いて其
の流麗な節調・詩文の良さに魅さ

れていつかこの詩は深く私の心に住
みつき、一へ吟じゆったりとした楽
しい気分になるのです。これは俵せ
な宝物です。

面白き事もなき世を面白く

注みなすものは心なりけり

(高杉晋作)

碩心会新理事きまる

桜花爛漫の春四月、碩心会も新し
い年度に当り新理事の顔ぶれが決り
この期に当り益々の発展を祈りたい
と思ひます。次頁に理事一覧表を掲
載いたします。

◎は支部長 ㊦は常任理事以外の指
導者です。(53年7月号記載の放場一
覧表お持ちの方は連絡者の訂正を)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 内 | 堀 | 建設 | 詠 | 銀 | 山根 | 同 | 沼 | 杉山 | A | 山 | 桜 | B子逗 | A子逗 | | | | | | | |
| 石 | 佐 | 杉 | 小 | 加 | 東 | 清 | 大 | 橋 | 栗 | 松 | 清 | 岡 | 荒 | 浅 | 磯 | 白 | 佐 | 綾 | 渡 | 竹 |
| 渡 | 久 | 山 | 峯 | 藤 | 柳 | 水 | 久 | 本 | 原 | 野 | 水 | 野 | 瀬 | 木 | 沼 | 磯 | 井 | 藤 | 部 | 村 |
| 桂 | 間 | 雪 | 智 | 槍 | 柳 | 耀 | 保 | 果 | 夾 | 春 | 耀 | 和 | 望 | 望 | 朋 | 照 | 誓 | 秋 | 秀 | 梅 |
| 風 | 溪 | 風 | 風 | 風 | 山 | 風 | 山 | 山 | 山 | 風 | 風 | 泉 | 風 | 風 | 山 | 山 | 風 | 風 | 風 | 風 |
| 準 | 準 | 準 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 |
| 計 | 松和 | 戸塚 | 大船 | A船 | 大 | 風早 | 木下 | 滝坂 | 元町 | 古口 | 諏訪 | 長柄 | 吟甫 | 山下 | 一色C | 一色B | A | 色 | 一 | |
| 四十二名 | 佐々木幹風 | 鈴木萃風 | 森田曉風 | 岩崎利風 | 松浦城風 | 石川豊山 | 松尾豊泉 | 宮寺康泉 | 矢島青泉 | 福本洋山 | 三留岑山 | 根岸治風 | 渡辺誠山 | 鈴木喜山 | 沼田義風 | 石井明山 | 加藤朋山 | 守谷宗風 | 鈴木孝風 | 黒崎秀風 |
| | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 | 支 |

碩心会支部会員一覽表・54年4月現在(395名)

| 大船地区 | | 兼山地区 | | | 逗子地区 | |
|------|----------|------------|-----------|----|------|----|
| 大船 | A B C 塚和 | 堀一色 | 内ABC | 64 | 逗子 | 38 |
| 大船 | 15 | 山 | 口南柄訪口町坂下早 | 7 | 桜山 | 10 |
| 大船 | 11 | 山下吟長諏上元滝木風 | のの | 6 | 沼山 | 19 |
| 大船 | 14 | | | 12 | 銀建 | 5 |
| 大船 | 19 | | | 27 | | 18 |
| 大船 | | | | 11 | | 10 |
| 大船 | | | | 9 | | 14 |
| 大船 | | | | 9 | | 14 |
| 大船 | | | | 10 | | |
| 大船 | | | | 9 | | |
| 大船 | | | | 20 | | |
| 大船 | | | | 7 | | |
| 大船 | | | | 9 | | |
| 計 | 67 | 計 | 200 | 計 | 128 | |

◎碩心会支部別会員数一覽表
 会員名簿にもとづき左記の通り一覽表を作製しました。
 54年4月現在26支部395名です。

◎県本部大会合吟練習
 ととき。六月十四日(木)七時半より
 ところ。逗子図書館ホール

◎加藤先生皆伝に：加藤冽風先生は三月四日付を以て皆伝認許され(主岳)となられました。

◎副部長決る：総務副部長に広瀬翔風氏、企画副部長に杉山雪風氏が選出されました。

◎けいこ場の変更：垣子Aは奉仕店会事務所内・桜山は四月より桜山下会館。

或るお弟子さんの思い出

三井 雲 岳

各教場の納吟会も終わった十二月の末、テープの整理をしていたら今はなき黒田詠風さんのテープが出てきた。宝船と九月十日の二篇で紫舟会の大会用に吹きこんだもので聞いている中に涙がとめどなく落ちてきた。勿論氏の思い出の涙も一部はあったがそれよりも師範であった私がこの様な名吟調が当時既に出来上っていた事に気付かなかったを恥じらいはじめを情なさへの痛恨の涙であったのだ。この後半年位で入院逝去されたのだか聞いていると節調豊かに、少しも力まず、余韻の強弱美事に抑揚も整い余韻を最後まで大切にシ

読から母音に変るところ、こまかで無理なく私などこの頃調子のいい時に出来るようになった技巧は氏は既に会得していたのに感じ入った次才の宝船の吟じ出し、さしかわす技むつまじく栄ゆらん、ととってみるとさレイかわアすうえだアむつうまじイくうさがアヤウらん、わきの小さい字の母音が実に軽く滑らかに出ていて、勿論そのため若干読みが間のびた感はあるが上達するまでの過渡期的なものとしては止むを得ない事と思う。

当時黒田さんの吟を聞くと体がしびれるよつたといったある女性会員のいた事を思い出す。水二本のがさかされた声であったが全身全霊を打ちこんだ吟であったからであろう。吟道月報36号に吟道夜ばなレ(ト)として私が勉強ぶりの一例として書いたが最近会員数も増加し極めて熱心な会員も多いのでもう一度氏の素真勉強ぶりの一端を要約して紹介したいと思う。

(以下次号につづく)

春季査定を終って講評の中から

- ◎ 初心者でもなるべく教本を持たぬ事
 - ◎ 人前で吟ずるには百回以上の練習を重ねる
 - ◎ 短歌、和歌の朗詠に情感が乏しかった詩文の魂にふれる事が大切でそれにはやはり練習量が必要、どうして二度繰返すか！前詠は外観的なものをとらえ、後詠は中味を表現する。
 - ◎ 指導する立場になるには声の訓練、発声練習を大いにしてほしい、色々なお弟子さんの声に合せられるよう天中軒雲月の七色の声を例に、
 - ◎ いい声を聞かすのではなく内容を聞かす。
 - ◎ 数多く吟じよ意味の自信を持つ事。
- 審査当日は寒かったせいかわらぬ方が多かったので講評の中から主なるものを抜萃してみましたが、要は数多く練習をつむむということに益きるのではないかと思えます。益々の御精進を。

(訂正事項)

54年2月号月報中、新指導者の紹介欄で松野

春風(沼間B支部)とあるを沼間支部B組に

けいこ(旺日(木)七時より

けいこ場所 東逗子音楽学校内

(△△員名簿訂正)

644 矢島ていをテイ

683 矢島コト一色二四九を二四九二に

208 寺脇宇た野を宇たのに

三月号入会高橋和代を高崎和代に

(人 △△)

(沼間支部) 中村芳一 逗子市沼間二一九一五

電 0463 一七三〇八四六

(山根支部) 小高さだ

電 0468 一七二一五五四

(堀内支部) 石も三郎

電 0468 一七五七一〇四

(退 △△)

57 井沢正風 76 井沢祐山

右退会により富士見支部はなくなりました。